

学校教育目標 「ともに成長し、未来を切り拓く児童の育成」

めざす学校像 『誰もが行きたい 行かせたい 来させたい学校』

めざす児童像 まなぶ子

はげむ子

あたたかい子

Let's challenge

Keep trying

Keep shining



HPへGO!



神郷北小だより



令和7年2月吉日号②

新見市立神郷北小学校

読書感想文コンクール（課題図書）

～思いやりで人はつながる「ぼくはうそをついた」を読んで～

金賞 高学年部5年 池田 陽飛さん

岡山県学校図書館協議会主催の読書感想文コンクールに応募し、新見支部審査会で金賞、岡山県審査会で入選を受賞した感想文です。池田君の正義感をくすぐる本との出会いは、この先素敵な出会いを期待させてくれたようです。



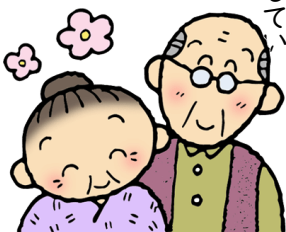
『うそつきはどろぼうの始まり』という言葉があるくらいだから、ぼくは、うそをついてはいけないと思っている。親には、いつも「正直が一番。」とか、学校でもうそをついたらいけないと言われているからだ。だから、うそつきはいけないことだと思っていた。しかし、この本に出合って、とても良いうそがあるのだと考えが変わった。この話は戦争のひきょうについて書かれている。平和な世界が大切だということも考えさせられたが、それ以上に人を思いやることのすばらしさに感動した。

ある時、主人公リョウタが友達レイの祖母と出会う。その後別れたが、レイの祖母は家に帰らず家族が心配して探した。リョウタと一緒にいたのを見たという情報でリョウタの家に聞きに来て、レイは、祖母が亡くなった息子のショウタを探しに行っていることを話す。自分の責任で祖母がいなくなったと思ったりリョウタは、祖母を探しに行った。暗くなった河原で祖母を見つけた。祖母は「ショウタ」とリョウタに呼びかけるが、聞き間違えてつい返事をしてしまう。そこからレイの祖母は時間が戻ったかのようにショウタに話しかけた。リョウタは違うと言えず、ショウタのふりをして話すことにしたのだ。ぼくは、いつもならうそは絶対にいけないと思っていたのに、この時は、特に気にならなかった。そして、祖母はショウタ（リョウタ）に対して「もう行っていいよ。ミノルさんが待ってるよ。ありがとう。」と言って迎えに来たレイ

の家族と帰った。その時の顔は今まで見たことがないくらい優しい顔だった。

ぼくは、心の中が熱くなった。人を苦しめたりうら切ったりするうそではなく、人を安心させるうそもあるんだと知ったからだ。ぼくには、そんな経験がまだない。でも、そのうそが一人の人を助けたり、周りの家族も助けることになるなんてびっくりした。一人もきずつくことのないうそなら、とてもいいと思った。それも思いやりの一つだ。

この本を読んで、人はたくさんの人に支えられて生きていくと思った。その根本にあるのが、思いやる気持ちだ。この物語の中にも、たくさんの思いやりが出てきた。リョウタやレイの祖父母への思いやり、家族からの思いやり…。しかもこの本で気付いたことは、思いやりはどんどんつながりを増やすことである。リョウタとレイは、初めは知り合いでもなかったのに、相手のことを考えて、その人のために行動したことで、知り合いになった。ぼくも、今は、まだ友達がたくさんいるというわけではない。これからたくさんの人と出会うと思うが、その人たちのことを考えて行動したいと思う。そして、そこからつながりをどんどん増やしていきたいと思う。自分が周りの人に対して思いやりの気持ちをもちて接して、くだけで、自分のつながりが増えるのだ。自分のこれから先がとても楽しみで仕方ない。



『ブルーベリーがり』 優秀賞 1年 仲田 壮志 くん

岡山県青少年育成県民会議が昭和 46 年から募集している「明るい家庭づくり」の作文募集で、新見支部会で入賞した作品です。家族との触れ合いをテーマにした子どもらしい表現、温かみを感じる作品として評価していただきました。情景が目浮かぶようで、ほっこりします。



ブルーベリーがり

一ねん なかだ そうし

ぼくとおかあさんと、しんじょうばあばとおばちゃん、きほちゃん、あやちゃん、ブルーベリーがりにいきました。

大山の下にあるブルーベリーはたけまでは、カートにのっていきました。みちにはいしころがいっぱいあって、カートはガタガタゆれました。きほちゃんがカートのすみにおいたカゴがおちりました。すぐに、カートをとめてもらって、ひろいにいきました。おかあさんとあやちゃんが、
「なにしてんの。」

といつて、みんなで大わらいしました。

ブルーベリーはたけについていたら、みになった木が、ずっとおくまでつづいていました。みはあおくて、ピーだまくらいの大きさでした。ゆびでつまんで、くるとまわしてとりました。きょうしつのでんじょうくらいいたかい木は、みきをゆすると、上からふつてきました。ふつてきたブルーベリーが、ぼくのあたまにあたったので、
「いたっ！」

そのあと、きほちゃんがはしつきて、木にずつきをして、
「いたあーい。」

と大さわぎだったので、みんなで、
「のろわれてるみたいだ。」

と、大わらいでした。



ブルーベリーは、すっぱいのもあまいのもあって、おいしくてたのしかったです。おかあさんは、一つずつたべていました。ぼくは五こずつたべました。ぜんぶで七十七こたべました。いえにもつてかえるようなタッパには、大もりのブルーベリーがとれてうれしかったです。

らいねんも、みんなで大わらいしながら、ブルーベリーがりにいきたいです。



お詫び

先月号で紹介した木村あかりさんの読書感想文で、最後の一文が消えていました。読み辛いものとなり大変申し訳ありませんでした。お詫び申し上げます。

最後の一文を紹介しますので、あかりさんの思いを受け止めていただけるとうれしいです。

……(略)……

そして、この本を読んで学んだことを、家族や友達にも伝えて、みんなで小さな一歩を歩き始めたい。

